

デジタル人間の図書館感

原野 一 誠

私とコンピュータの出会いは建築中の九州大学大型計算機センターに米軍ファントム戦闘機が墜落した昭和43年、九大薬学部助手になった年である。その後、昭和47年に単結晶X線回折法による医薬品分子の構造解析を始めたのがきっかけで計算機センターに通うようになってから、コンピュータとの対話は25年を超えた。

当時、数週間かかっていた反射測定やカード入力方式による数値計算も最近ではワークステーションやパーソナルコンピュータで数日で終了し、大型の汎用計算機にお世話になることはほとんどない。並列計算機やベクトルプロセッサを利用する場合も学内LANのおかげで計算機センターへ出向く必要もなくなった。複雑な図版を含む論文作成や推敲もワープロ機能で解決、紙に原稿を書くことも英文タイプライターを利用することもない。さらに、CD-ROM版の辞書集、百科事典、地図などをCDチェンジャーに入れて使用するようになってから、これらの書籍を手にすることもなくなった。郵便を利用するのは年賀状だけ、ほとんど電子メールで済むようになった。英国化学会などは、レフェリーの意見も電子メールで飛び込んでくる始末である。自宅と大学のネットワークがPPP接続できるようになってからは、ほとんどの仕事が自宅の書斎から対応できるようになった。

このような背景を持つデジタル人間の私が薬学部図書館のお世話をする事になり1年が経った。一昔前までは図書館の情報化は貸出業務、カード検索に代わる手段と考えられていたが、最近では文献の2次情報どころか1次情報もデジタル情報として提供される時代となった。出版社のほとんどが活字から電子製版へ移行したわけだから、紙に印刷するのは余分なこと、いつでもできることであり、図書の電子化は当然の成りゆきといえる。なかでも、電子化の恩恵を受けている分野に化学情報がある。ケネディの情報公開法によりロッキード社から独立したダイアログ社がChemical Abstracts (CA) 情報のオンラインサービスを始めるまでは、化合物の合成法や性状を調べるためには図書館にこもり、膨大なCA誌を頼りに、オリジナル文献を探すことが日常的であった。最近、熊大でもCD-ROMや商用ネットワークが利用できるようにな

り、書庫にこもることもない。CAのCD-ROM化に抵抗していた先輩達も、収載された化合物数が1000万個を超えたことを知ると皆納得したようである。若い人は文献検索はコンピュータでやるものと思うようになった。

コンピュータ支援による作業により膨大な時間的余裕が生まれ、「ゆとり」として趣味などに生かされ、ひいては創造的思考の再生産のために活用できているはずである。ところが、私はまったく逆の経験をしている。問題が早く解決すればするほど、ますます問題が増え余裕がなくなる。原因はいろいろ考えられるが、周囲と調和していないことが問題のようだ。「元来、コンピュータは本来人間がやれることをスピーディにやるだけのことであり、人間の発想を変化させることはない」という考え方もあるが、情報化が成熟すればそのメリットを享受できるはずである。

ところで、開かれた大学という言葉をよく聞く。地方大学の発展は地域社会と歩調を合わせるべきと思うが、民間との共同研究、卒後教育、公開講座などに精を出しても限界がある。大学が所有している膨大な情報、さらに教育・研究活動により創り出される情報を電子化して公開すべきである。薬学部でシラバス、学部案内などをホームページで、医薬品情報を図書館のサーバを使って発信させてもらっていること等はその一例である。

書籍が紙を記録媒体にしているのは決して地球環境にやさしいことではない。森林伐採、酸性紙、焼却時のダイオキシン発生などの問題を考えると、紙以外の記録媒体に置き換わるのもそう遠くはないはずである。

情報を収集、分類、蓄積し、検索することはコンピュータが最も得意とするところであり、これに高速ネットワーク機能が加わり、急速に応用分野が広がっている。

電子化により、書籍以外の画像を含めた24時間電子図書館が実現することが私の夢である。熊本はその規模などから情報ハイウェイによるマルチメディア化の効果が期待できる格好の都市である。大学図書館はその中心に位置すべきものであり、そのために総合情報処理センターなどを含めた図書館の在り方を議論すべき時である。

(はらの かずのお 薬学部教授 薬品製造工学)